

## ◆ 北都税事務所長賞 ◆

「剣道から考える税」

北区立王子桜中学校 三年 高木 瑞稀

僕は、消費税が嫌いだった。何か物を買った時、「消費税で取られたお金があれば、何に使っただろうか。」などと考えてしまう。

僕は前に歴史の授業で、昔の農民は、国の役人に取り立てられていて、その税で貴族は、豪華絢爛な食事をしていたということを知った。それ以降、僕は、税というものにあまり良いイメージを持っていなかった。税というものに無関心だった僕は、税金の使い道を知らなかった。

僕は、小学三年生の時から警察署の少年剣道部に所属している。中学校に入学してからは、剣道部にも所属し、毎日、大好きな剣道で汗を流していた。警察署内の道場や中学校の武道場で稽古に励み、中体連の大会や北区主催の区民大会や段審査会にも参加した。楽しく剣道ができる毎日が僕の日常で、その毎日が当たり前であることを当たり前だと思っていた。その生活が何によって守られていたのか、僕は、一度も考えたことがなかった。けれど、この作文を機に、税について調べたことで、今の毎日があるのは、「税金」のおかげだということに気付いた。税金は、自分の身近な物に使われており、僕達が毎日通っている学校や、危険から守ってくれる警察署もまさにそうだった。また、剣道を教えてくれる部活の顧問の先生や警察署の先生、稽古をつけてくれる署員の方も公務員であり、税金が給料となり生活できている。大会や審査会の会場として使う、日本武道館や東京武道館、それ以外の都や区などの運営する体育館なども、税金が使われており、運営されていた。このように「剣道」だけでも様々なものに使われていた。

僕らが納めた税金は、形を変えて自分達のところへ返ってくる。身近に有り過ぎて、気付かないが、沢山あふれている。今日も税のおかげで楽しく過ごす事が出来ている。納めた税が返ってきているのだ。剣道では「礼に始まり、礼に終わる。」という言葉がある。剣道を教えてくれた相手に、また、練習をさせてくれた相手に対して感謝する。そして、道場に対して感謝の意を込めて、毎日綺麗に掃除をする。つまり、自分が剣道ができる全てのことに感謝の気持ちを忘れないのだ。だから、僕は剣道ができる環境を支えてくれる「税」にも、納税する全ての国民にも、日頃から感謝していきたいと思う。自分も大人になったらきちんと納税する人間になりたい。